



北海道の労働と福祉を考える会 会報

ともに生きる

2011年12月9日発行（第24号）

～傍らを あるきながら

前号に引き続き、過去に労福会の活動を担った人に当時の様子や思い出を語ってもらいました。今回語ってもらうのは、2006年度の事務局長を務めた世良迪夫さん。現在活動している労福メンバーの殆どが直接はお会いしたことのない方ですが、世良さんの文章を読むと、確かな歴史の流れを感じます。

「ちょっぴりを広げて」

世良 迪夫

この人は喋るのがうまいから初めての人向けの説明を任せようとか、あの人は熟練だから若い子をつけて勉強してもらおうとか、そのようなことを仕事でやっている、学生時代に労福会の事務局で活動していたときのことを思い出します。

僕が労福会事務局で活動していたのは、もう4.5年も前のことです。今は東京でサラリーマンをやっている、札幌のホームレス事情とは縁もゆかりもない生活をしています。それでもやはり、むかし関わった活動は気になるもので、今でも遠くから見守らせていただいています。

僕が活動していた当時の会報は、50部刷れば十分だったように記憶していますが、聞くところによると今では500部と当時の10倍も発行しているとか。それだけ、労福会の活動も広がっているということなのでしょう。夜回り活動に関しても、現在のように月2.3回実施し、ボランティアが10~20人も集まるようなものではなく、不定期に5.6人で行う程度の小さなものでした。定期に夜回りを行うようになった当初など、少ないときはボランティア3.4人で狭い範囲を回っていたこともありました。いまでは、事務局メンバーではない一般の方々にも多数参加していただいているようです。

初めて夜回りに来た人に話を聞くと、たいいてい

「会って喋ってみると普通のおじさんだった」という感想をもらいます。それはいまもむかしもあまり変わっていないのではないかと思います。多くの人にとっては非現実的なホームレスという概念だけれど、労福会を通じて一步踏み込めば、現実なおじさんたちがそこにいる。社会とおじさんたちを繋ぐ橋渡しとして大きな存在になっていると思います。個人的には、ホームレスという言葉にあまり興味を持たない人にも、おじさんたちとの繋がりができて、ただの日常の一部として接する場をつくれることがとても大事だと思っています。僕自身が、労福会に関わる以前はあまり関心がなかったのが、ちょっぴりずつですが次第に深めることができたからです。

これまでホームレスについて考えていなかった人を、ちょっぴりでも考えられるようにする。とても難しいことだと思いますが、実際に活動を続けていったことで、ちょっぴりでも考えるようになる人が広まっていっているんだなという実感があります。多数のちょっぴりの気持ちをひとつにまとめ上げるのは困難なことで、事務局の活動というのは地味でたいへんなものですが、時間をかけてでも、ちょっぴりずつ考えを進める手助けをこれからも継続して広めていって欲しいと思う今日この頃です。

ビッグイシューさっぽろ

活動について

事務局長 平田なぎさ

ビッグイシューは、「ホームレスの仕事をつくり自立を応援する」目的で作られた雑誌で、1冊300円。このうち160円が販売者の収入になります。雑誌「BIG ISSUE」は1991年にロンドンで創刊され、その後「ビッグイシュー日本版」が2003年9月に販売開始しました。札幌では2007年6月頃から労福会の夜回りや炊き出しの際に販売者を募集し、試験販売をしたり、サポート体制を構築したりしながら準備を進めました。卸作業場所としてさっぽろ自由学校「遊」の協力をいただき、同年9月3日から販売がスタートしました。

当初の問題は札幌の「冬」でした。ビッグイシューは路上販売ですが、氷点下の気温と雪の中、長時間外に立って販売をするのは不可能で、その解決策として札幌市と札幌市交通局の協力を得て、地下鉄東西線コンコースでの「ブース販売」ができるようになりました。

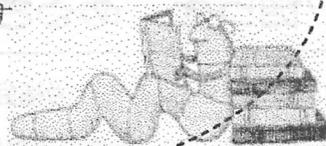
実はこの頃、私は札幌には住んでいなかったため、まだ関わっていませんでした。私がビッグイシューさっぽろのボランティアスタッフとして活動を始めたのは2008年の春です。業務・活動の増加に伴い、2008年3月に「ビッグイシューさっぽろ」という団体が発足し、ちょうどその頃札幌へ引っ越してきた私もお手伝いをするようになったのです。その後、事務局メンバーとしてより深く活動に関わるようになりました。

当時、ビッグイシューさっぽろの問題は販売者の「居宅」でした。「次の冬のブース期間中に全員の居宅をめざそう」と、販売者ひとりひとりの担当者を決め、サポートしました。

サポートは簡単ではありませんでした。住民票が職権削除されている場合や保証人の問題など、ホームレス状態になってしまった方が「自力だけ」でア

もうそろそろ

協力連携いただいている団体を
順にご紹介します



パートに入ることはほぼ不可能だということを改めて思い知ったものです。幸い、いろいろな方の協力を得て、結局は2度目のブース販売終了時までには当時の販売者全員がアパートに入ることができました。

しかし、ホームレス問題は、障がいや差別、ひとり親家庭などの貧困の連鎖、DVや職場でのいじめ、そして悪化し続ける雇用状況など様々な問題に日本社会全体が向き合うことなく、逆に「見たくないものは見ない」「自己責任」そして「排除」となって現れている本当に根深くしかも複雑な問題です。

広く市民にこの問題に気づいてもらい、考えてもらうために、ホームレスの可視化という意味でも、ビッグイシューは有効です。また、販売者にとっては日々お客さんと接することが元気の源にもなっている、ということを通して感じており、そこにビッグイシューの活動の意味を見出しています。

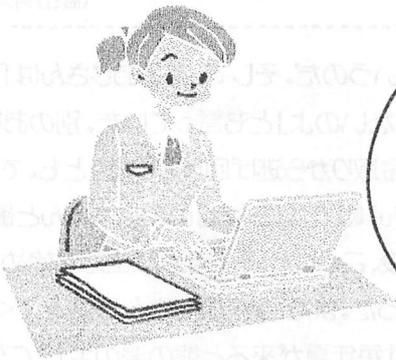
ビッグイシューのボランティアスタッフはほとんどが社会人や主婦の方で、稼働人数は約20名。購読者から募集しているのが熱心で真面目な方が多く、いつも助けられています。

それにしても一時期は盛り上がった貧困問題への世間の注目が薄れているようで、気になります。震災や原発に注目が集中するのはやむを得ないと思いますが、震災前は児童擁護施設にランドセルを贈る「伊達直人」ブームが起きたのに、そこからさらに深く児童養護施設が抱える問題や、そこを出た後の若者のことを考えていこう、という流れにはなりません。労働者派遣法の改正も、道半ばです。

これらホームレス問題につながる問題を労福会の皆さんとともに考えていきたいですね。

教えて！安東さん！！②

～司法書士、安東さんが解りやすく教えてくれる福祉に関する Q&A～



がんばって仕事を探しているのですが、なかなか仕事が決まりません。

先日、ケースワーカーから、

**Q：「3か月以内に仕事が決まらな
いと生活保護を切る」と言われ
ました。生活保護は、うち切ら
れてしまうのでしょうか？**

**A：「もし、3か月以内に仕事が決まらなくても、それだけで生活保護を
うち切ることはできません。」**

生活保護は、自分でできるだけ努力をしても生活ができないときに、受けることができるものです。なので、働くことのできる人は精一杯働き、失業中の人は一生涯懸命仕事を探す必要があります。

役所は、働けるけれども失業中の人に対して、仕事を探すよう指導します。これを、就労指導といいます。就労指導は、ご本人の生活の維持・向上その他保護の目的を達成するためのものです。ご本人の自由を尊重して必要最小限にとどめなければなりませんし、ご本人の意に反して強制することもできません（生活保護法27条）。

さて、ご質問の件ですが…

「3か月以内に仕事が決まらな
いと、生活保護を切る」と言われても、自分ではどうにもできないで
すよね。一生涯懸命仕事を探しても、雇うかどうか決めるのは、相手なので
すから。

「求職活動をしなさい」「求職活動の報告をしなさい」という指導はよいですが、「仕事につきなさい」という指導は不当です。

同じようなケースで、不服申立が認められたものがあるので、ご紹介します。

「〇月〇日までに増収を実現し保護から自立するよう」文書で指導され、保護を廃止されてしまった方が、北海道庁に不服申立をしたケースで、北海道庁は「保護の廃止はダメ」と判断しました（平成17年3月16日北海道知事裁決）。

理由ですが、法律に照らし、役所が、生活保護を利用している本人に対して、保護からの自立を直接指示できると考えることはできないので、そういった指導指示は不相当であり、また、指示の内容についても、本人が収入を増やしたい気持ちがあつて、求職活動がんばったとしても、必ずしも達成できるとは限らない、と言っています。

就労指導の対応ですが、できるだけ努力をしたが就職できない、ということを役所にわかってもらうことが大事です。

なので、ハローワークなど記録の残るところで求職活動をしたり、電話や面接の様子を細かくメモしたりするのがよいでしょう。

それでも無茶なことを言われたときは、ご相談ください。（安東朋美）



タカダコウタロウの 「もうどっか行くしかない！」

北海道はキャンプ王国だ。これだけの大自然を抱えた土地ならではのキャンプ場が各地に点在していて、キャンプだけで旅行している人も沢山いる。今回は、数あるキャンプ場の中でも特に印象に残っている「熊の湯キャンプ場」での思い出について書こうと思う。
(高田晃太郎)

第二回「退屈からの逃避」(2011年8月)

知床半島の南東を占める羅臼町には3つのキャンプ場があるが、その中でも特に人気なのが羅臼温泉野営場、通称「熊の湯キャンプ場」だ。ここのキャンプ場は長期滞在の人が多く、独特の雰囲気を持っている。その魅力は多分3つ程あって、1つは羅臼の夏が涼しいこと、もう1つは釣り場が近くにあること、そして「熊の湯」と呼ばれる無料露天風呂が隣接していることだ。

僕はその夜、熊の湯でゆっくりしてから、その側にある小さなベンチに寝袋を敷き眠りについた。そしてあくる日の早朝、掃除をしに来たおじさん達に起こされ、話の流れで僕も手伝うことになった。掃除はお湯を全て抜いてからデッキブラシを使ってこすり、またお湯をはる。掃除が終わってからみんなで入れたての湯船に入る。みんなで8人程いたが、それでも余裕で入れるくらいの広い湯船なのだ。みんな凄く気さくで、あるおじさんなんかは「少年、湯船に入る前はまずケツの穴を洗えよ！でも指は2本までな！3本入るとクセになるからな！」などと冗談を飛ばしてはみんなを笑わせていた。

風呂から上がった後、彼らの居場所である駐車場までついていった。車の中を覗くと、後部座席に畳が敷いてあるのとか、自炊設備が備わっているのとか、どの車もいろんな改造が施されていて、彼らがもう長い間車の中で生活していることが伺えた。

話をしてわかったのは、彼らは隣のキャンプ場でもう一カ月以上も過ごしている道外の人達で、地元の人に代わって毎朝朝早くに起き、湯船の掃除をしているらしい。しかも彼らはテントを張ってキャンプしている訳ではなく、キャンプ場の駐車場で車中泊して過

ごしているというのだ。そして、あるおじさんは「俺には帰る家がないのよ」とも言っていた。別のおじさんは「俺は借金取りから逃げ回っている」とも。でもそれは(たぶん)嘘で、彼らは若い頃はちゃんと働いていて、退職後、こうした悠々自適な生活を始めたのだらうと思った。また、あるおじさんが教えてくれたのは、彼らは毎年夏が来ると熊の湯のキャンプ場にやって来て、寒くなるまで何カ月もここで過ごすらしい。お互い友達でも何でもなかったが、毎年、顔を合わせることによって仲間同士になった。自炊し、お互い助け合いながら生活しているそうだ。「毎日何して過ごすの？」と聞くと、「朝起きて熊の湯の掃除をする、朝飯を食う、昼飯を食う、夕飯を食って寝る、そうして今日もいい一日だった、明日もそうなるように祈るのさ！」と答えてくれた。

(結果的にではあるが)「集団」でこのような老後の人生を送っている人達の存在を僕は熊の湯キャンプ場しか知らないが、単独でなら、道内外に関わらず道の駅などで見かけることがある。彼らは夫婦であったり男1人であったりするのだが、みんな大きな車にいろんな荷物を積んで全国を動き回っている。それは多分、退屈から逃れるためで、きつとずっと同じ場所にいるのにたえられないのだろう。

そして、「移動し続ける」、すなわち全国各地を転々とするホームレスもきつと存在していて、実際、僕も夜回りをしているという人に出会ったことがある。その人は札幌駅近くの暗闇でマットを敷いて横になっていたが、「大阪から青春18切符で札幌に来たんや」と言っていた。今思い返すと、彼も、ずっと同じ場所にいるというある種の退屈さから逃れ続けているのかもしれない、と僕は思った。



事務局だより

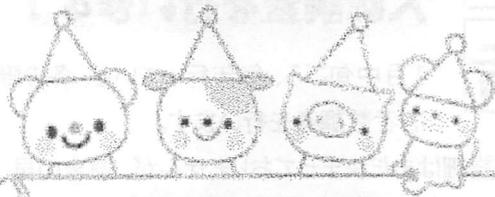
◆新しいピラの効力

私が事務局長になった春、労福会に大学生を増やそうと、あの手この手で宣伝しましたが、それでも会員はほとんど増えず、そのまま短い夏が過ぎて早い秋が来ました。これはまずい、というわけで実験好きな私は、遊び心で新しいピラを作り北大に掲示しました。大きな文字で「ホームレス」と掲げ、炊き出しと夜回りのカラー写真で彩りをつけ、以前のピラは事務局長と事務局次長だけでしたが代表と副代表の名前と肩書も載せました。すると「ピラを見ました」というメールが急増。こんなに簡単に集客できるならもっと早くすればよかった。困ったときは新しい方法を試すという、当たり前のことの大切さを改めて実感しました。

◆高田くんの一言から

運営会議は毎月1回開かれます。11月12日(土)の運営会議は炊き出し、調査、そしてクリスマス会・あけました会について話し合いました。これで終わればいつもの会議ですが、労福会のトリックスター、高田くんが「労福会がつまらない」と発言し、珍しく労福会自体についての話し合いが始まり、どうすれば面白くなるのか、笑顔を保ちながら忌憚なく意見を飛び交わせました。やりがいを感じるためには手間をかけ試行錯誤することが必要だけど今は仕事に追われ余裕がない、労福会内部のコミュニケーションが足りないという意見に一同が共感し、前向きに反省することができました。立ち止まって考えるスイッチになってくれた高田くん、ありがとう！

(内山 明)



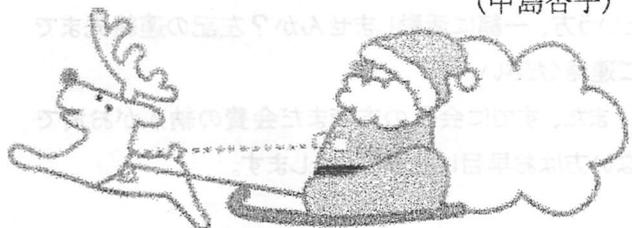
編集後記

今年度3号目の会報をお届けします。発行回数、部数拡大をしてなによりうれしかったのは、当事者のみなさんが結構読んでくださっていること。夜回りの際に持参すると、エルプラザでもらってもう読んだよ、という声が返ってきたりします。中身について、どうだった？と感想を聞きたい気持ちはヤマヤマなのですが、酷評されるとペチャンコになりそうなので、ぐっとこらえて、今はとにかく情報提供と定期刊行に努めようと思います。でも、もっといろいろな方に書いてほしいなあ、いつかは当事者の方の生の声も載せたりしたいなあ、と思っているのですが……。 (細谷洋子)

前回の会報作りには参加していなかったのですが、今回やっぱり会報作りって楽しいなあと思いました。読んでくれる人がいると思うと、何時間でもああでもないこうでもない、パソコンに向かっていられる気分です。今回は前回までベテランさんが担当していたインフォメーションページを担当させていただきました。実はずっとやりたかったんです(笑)

次号は3月発行予定です。お楽しみに！

(中島杏子)



インフォメーション

行事のおしらせ

☆クリスマス交流会

フォローアップ企画！みんなでカレーとサラダを作って食べましょう！あなたの料理の才能が目覚めるかも？

とき：12月24日(土) 9:30~15:00

場所：エルプラザ4階料理実習室

参加者 30 名ほどを予定しています。

料理&交流
皆で楽しもう！

☆あけました会

2012 年最初の企画です！お正月ということでお雑煮をつくります。ぜひお越しください！

とき：1月7日(土) 9:30~15:00

場所：エルプラザ4階料理実習室

参加者 30 名ほどを予定しています。

夜回り

次回夜回りは

12月17日(土) 20時~

参加者の方は札幌駅南口アピアドームにお集まりください。解散は 22 時ごろの予定です

会員募集・会費納入のお願い

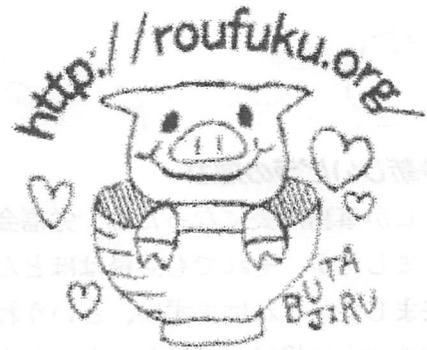
厳しい冬がやってきました。「北海道の労働と福祉を考える会」では、引き続き会員を募集しています。

***野宿や貧困の問題に関心がある！**

***誰かの力になりたい！**

という方、一緒に活動しませんか？左記の連絡先までご連絡ください。

また、すでに会員の方でまだ会費の納入がお済でない方はお早目にお願いいたします。



ご寄付いただいた方々

ありがとうございました！

マーガレット教会のみなさん

オルカさん

札幌北一条教会さん

(2011年9月1日~11月31日)



予告

人数調査を行います！

1月中旬ごろ、毎年行っている、冬の野宿者数調査を行います。

詳細はまだ決まっておりませんが、週末の早朝に札幌市内の各地区で行う予定です。当日お手伝いしていただけるボランティアを募集いたします。ご協力をよろしくおねがいします。

「ともに生きる」第24号

2011年12月10日発行

北海道の労働と福祉を考える会

発行責任者：嶋田佳広

編集担当

大友駿・細谷洋子・黒森理恵子
工藤浩美・高田晃太郎・中島杏子

〒001-0010

札幌市北区北10条西1丁目4-1 近藤アパート 201

電話 090-7515-8393

090-7515-8393 (相談)

E-mail info@roufuku.org

ホームページ <http://roufuku.org>

ブログ <http://roufuku6029.blog95.fc2.com/>